

英語の諺における one の用法

藤原保明

まえがき

「諺」(proverbs)は一般に比較的短い、独立した単一の文から成り、文法ないしは意味上の情報を他の独立した文に依存することはない。それゆえ、諺にはかなり強い言語上の制約が課されていることが想定される。この制約は、語が諺の中で占める位置や語の範疇や機能によっても異なる可能性がある。それゆえ、本稿では英語の諺の冒頭に生じる one に対象を限定し、one が範疇と機能によってどのような特徴を示すかについて考察したい。なお、諺の冒頭の one は a man/men/man と交替することがあることから、本稿ではこれらの名詞(句)で始まる諺も分析対象に含めることにする。

諺は、たとえば *NODE* (1998: 1492-3)によると、'a short pithy saying in general use, stating a general truth or piece of advice.' と定義されているが、'short', 'pithy', 'general' のような程度に差がある形容詞をいくつも用いていることから、この定義に従って諺という対象を厳密に絞り込むことは困難である。一方、*OALD* (2005: 1215)は諺を 'a well-known phrase or sentence that gives advice or says something that is generally true, for example 'Waste not, want not.' と定義していて、*NODE* より明確になっているが、'well-known' によって包含される範囲を画定することはむずかしい。

諺は、英語に限った場合でも、時代、方言、使用域 (register) などによって異なる可能性がある。本稿の目的は英語の諺を言語学的観点から分析し、一般的な特徴を提示することにあることから、網羅的であることよりも概要の把握に重点を置きたい。それゆえ、今回は諺の厳密な定義に深入りせず、特定の諺辞典から抽出された該当例を分析することとする。英語の諺の辞典はこれまで数点が刊行されているが、Tilley (1950) は 16, 17 世紀の英語の諺に限定していること、Evans (1970) や Speake (2003) は規模が小さすぎることから、いずれも本研究で依拠するには適切ではない。一方、Wilson (1970) は例が豊富で

さまざまな情報が盛り込まれていることもあり、本稿ではこれを典拠とした。もっとも、大塚・高瀬(1976)は類書の中では比較的新しく、例と情報量が多いことから、必要に応じて参照した。とりわけ、本稿の引用例の日本語訳は全面的にこの辞典に依拠した。もっとも、本稿で Wilson(1970)と大塚・高瀬(1976)に収録されている例をすべて分析の対象としたわけではない。たとえば、(1)のような一種の婉曲表現は諺のごく一般的な定義にも合致しないこと、および、該当例は2例にすぎないことから、分析対象から除外することにした。

- (1) a. One of my aunts/cousins 「おばさんの一人(prostituteのこと)」
 b. one whom the brewer's horse has bit.
 「酒屋の馬が噛んだ人(drunkardのこと)」

一方、諺の一部に異形が用いられる(2)のような例は少なくないが、異形が趣旨の全く異なる諺を生じない限り、同一の諺とみなした。

- (2) a. One deceit/falsehood drives out another.
 「一つの嘘はもう一つの嘘を押し出す。」
 b. One knave will favour/seek out another.
 「悪党は悪党に興味を示す。」
 c. One pair of heels/legs/feet is (often/sometimes) worth two pair of hands. 「一対の踵は二対の手に値する。」

本稿では、one を独立用法と非独立用法に区別する。この理由は、前者の one には名詞、代名詞という範疇の区別と one's という限定用法があるが、後者には限定用法しかなく、意味上も数字の1に対応するものに限られるという明確な区別があるからである。

I. 非独立用法の one

One が主要語(heads)を必要とする非独立の限定詞として用いられている諺は104例ある。これらの諺は、成立時期からすると16世紀と17世紀に由来するものが圧倒的に多く、77例を占めていて、12, 13, 15, 20世紀のものが各1例、12世紀が2例、14世紀が5例、19世紀が7例、18世紀が10例となっている。中英語期に由来する9例のうち、在来のものは6例のみであり、他の4例はギリシア語またはラテン語起源のものである。16世紀の40例の諺にはギリシア語やラテン語の諺6例に加えてフランス語起源のものも1例含まれているが、興味深いことに、17世紀以降は外来起源の諺は、スペイン語とドイツ語起源のもの各

1 例以外は一切用いられていない。これにはラテン語の文献の影響力低下が深く関わっている可能性がある。すなわち、ローマ教会から分離独立したイギリス国教会が1534年に設置された後、宗教改革が実施され、ヘブライ語原典からの聖書の翻訳などにより、ラテン語訳の聖書やラテン語の文献に対する依存度が低下したことが背景にあると思われる。ちなみに、one のみならず、a man/man/man で始まる諺の場合でも、16, 17世紀に成立したものが圧倒的に多いのは、Tilley が収集した膨大な量の諺が典拠の一つとなっているからであろう。

非独立用法の one で始まる諺について言語上興味深いのは、‘one-another’ という型を形成する場合が43例あり、しかも、このうち another が諺の末尾に位置するのは28例もあること、および、その他のほとんどの例は one と他の数詞が対比される形式になっていることである。‘One-another’ 型とは対照的に、one が other と対比される ‘one-the other’ 型の例は全く生じない。One は古英語や中英語においてすでに other と対比して用いられていることから、この点は検討に値する (Rissanen 1967:92-97)。One が他の数詞と共に共起する場合、数詞の生起にはかなり強い制約があることから、この点についても検討したい。

1.1. One-another 型

非独立用法の one が another と対比される例は43回も用いられていることから、興味深い一般化が可能となるかも知れない。最初に、another で諺が終了する (3) のような場合は43例中28例を占める。

- (3) a. One business breeds another. 「仕事は仕事を生む。」
- b. One kindness is the price of another.
 「甲の親切は乙の親切を得るための代価である。」
- c. One misfortune comes on the neck of another.
 「不幸は踵を接してやって来る。」

‘One-another’ 型の場合、another は所有格になる (4a) の一例と、後続の名詞が所有格となる (4b, c) のような 3 例を除いて、次に名詞を従えない代名詞の独立用法に限られ、しかも諺は another で終了していて、‘one-another’ という一種の枠構造が成立している。

- (4) a. One crow never pulls out another’s eyes.
 「烏同士は相手の目をえぐり取ることをしない。」
- b. One man’s breath is another man’s death.
 「甲の生は乙の死である。」

c. One man's meat is another man's poison.

「ある人々には食物であるものも他の人々には毒である。」

次に, *another* で終る (3) のような28例の諺は 4~8 語(平均5.04語)から成る短い諺となっているのに対して, *another* で終らない(5) のような15例の諺は比較的数字が少なく, また, 7~13語(平均9.80語)から成る長い諺となっている。ちなみに, (3) のような諺が比較的短い原因は, 単一の節から成ること, および, (3a) のように *another* が述語動詞の目的語となっている例が多いからであろう。一方, *another* を含む諺が長くなるのは, (5) のように諺が二つの節から成ることが主な原因と思われるが, 詳細は(9)の例について考察する際に明らかにしたい。

(5) a. One barber shaves not so close but another finds work.

「一人の床屋がどんなにつるつるに剃っても別の床屋がさらに手を加えて剃る余地はあるものである。」

b. One man may steal a horse, while another may not look over the hedge. 「乙は生垣越しに見ることさえできないのに甲は馬を盗むことさえできる。」

c. One thing thinks the bear, and another he that leads him.

「熊の思う事と熊を引く者の思う事は別である。」

詩の場合, 韻を踏ませリズムを整えることによって, 読者や聞き手の感覚や感情に訴え, 記憶に残りやすくする試みがなされているが, 諺の場合にもこのような工夫がなされているであろうか。このような意匠が諺に込められているか否かを確認するために, まず, 同じ子音で始まる語が2~3含まれ, したがって頭韻が実現していると思われる(6) のような9例について検討してみた。その結果, 頭子音が同一となっている2語のいずれかが他の語と置き換えられ, 頭韻が成立しなくなる(6a, c) のような例がいくつもあること, さらには, 頭子音が一致する語が3つ含まれる場合は一例にすぎないことが明らかとなった。これらの事実を考慮すると, (6) のような例では頭子音は偶然一致しているにすぎず, 頭韻は意図的ではないと判断できる。

(6) a. One bit draws down/on another. 「一口はもう一口を招く。」

b. One man may steal a horse, while another may not look over the hedge. 「乙は生垣越しに見ることさえできないのに甲は馬を盗むことさえできる。」

c. One tale/story is good until another be told/heard.

「甲の話は乙の話が語られないうちは立派である。」

次に、'one-another' 型の諺をリズムの面から考察してみる。今回はこの型の諺の中で最も短くて頻度数の高い 4 語と 5 語から成る 22 例と 6 語から成る 4 例について分析してみる。最初に、4 語の場合、言語上の主強勢がリズム上の強音部を占め、弱強 2 詩脚のリズムが形成される (7a, b) のような諺は 3 例のみであり、他の (7c, d) のような 6 例では、たとえば言語上の主強勢を韻律上の弱音に降格させるという解釈を施しても、規則的な弱強 2 詩脚のリズムは形成されないことが明らかとなった。

- (7) a. One bárber tríms anóther. 「甲の床屋 (= 外科医) は乙の床屋 (のひげ) を (無料で) 刈り込む。」
 b. One fúneral mákes anóther. 「葬式は一度あるともう一度ある。」
 c. One fóol práises anóther. 「馬鹿は馬鹿をほめる。」
 d. One knífé whéts anóther. 「ナイフがナイフを磨く。」

次に、5 語から成る 13 例の場合、一般に語数が多くなるとリズムを調整しやすくなると思われるが、実際には、言語強勢のまま弱強 5 詩脚のリズム型を形成しているのは (8a) の 1 例のみである。強勢の調整を行なうと弱強 5 詩脚が実現できるのは (8b) を含め 7 例あるが、他の 4 例では、(8c) のようにきれいなリズムは形成されない。

- (8) a. One múle does scrúb anóther. 「甲のらばが乙のらばをこする。→ 互いにへつらう / 友人の好意には報いなければならない。」
 b. One góod túrn desérves anóther. 「甲の善行は乙の善行に値する。」
 c. One decéit dríves out anóther.

「一つの嘘はもう一つの嘘を押し出す。」

さらに、6 語から成る 4 例の場合、強勢の調整を施すと弱強 4 詩脚が形成される 2 例と、このような調整を許さない 2 例に分かれる。これらの分析結果を総合すると、4 ~ 6 語から成る諺には明確なリズムを形成させようとする意図は強くなかったといえよう。

次に、another が諺の末尾に生じない (9) のような 15 例について考察したい。上述のとおり、これらの諺は 'one-another' 型の諺の倍近い語数から成ることから、その原因を明らかにしておかねばならない。第一に、(9a, b) のように、another が主語または動詞の目的語のいずれであるにせよ、諺が二つの節から成る場合が半数以上の 8 例を占めることから、必然的に諺全体が長くなると考えられる。次に、主語と述語全体が対比される (9c, d) のような例や、one

と another を含む句が対比される (9e) のような例も諺を長くする原因となっているものと思われる。

- (9) a. One tale is good until another be told.
 「甲の話は乙の話が語られないうちは立派である。」
- b. One hand washes another but both the face.
 「一方の手は他方の手を洗う、しかし両手は顔を洗う。」
- c. One man's breath is another man's death.
 「甲の生は乙の死である。」
- d. One man's meat is another man's poison. 「甲の食物は乙の毒。」
- e. One law for the rich, and another for the poor.
 「錢ある者は生き錢なき者は死す。」

1.2. 他の数詞との対比型

非独立用法の one が他の数詞と対比して用いられる場合、これらの数詞にはかなり明白な制約が見られる。すなわち、one は一桁の数字の場合には one (5例), two (10例), three (3例), seven (3例) のみと共起し、二桁以上の数字では ten (4例), twenty (1例), fifty (1例), hundred (6例) 以外の数詞と用いられることはない。次に、one が one と対比されるのは (10a, b) の 2 例であるが、(10a) の at one door は at a door, (10c) の for a woman は for two men という異形がそれぞれ用いられていること、および、(10c, d) では、a は one 「一つの」という意味で用いられていると判断できることから、one-one という形式と同等とみなせる。(10e, f) の a house と a baking についても同様の解釈が可能である。ただし、(10g, h) の a trudge と the turn については、one trudge および one turn の可能性は低いと思われる。なお、(10h) の the turn は serve the turn 「役に立つ」の意の熟語の一部であることからしても a turn や one turn にはなりえない。

- (10) a. One beggar is enough at one door.
 「一軒の戸口には乞食は一人いれば十分である。」
- b. One dog, one bull. 「一犬一牛。= 'fair play'」
- c. One tongue is enough for a woman. 「女には舌は一枚で十分である。」
- d. One thing at a time. 「一度には一事。」
- e. One master in a house is enough.
 「一軒の家に家長は一人いれば十分である。」
- f. One scone of a baking is enough.

「パン焼き一回で菓子パン一個できれば十分である。」

g. One thing said twice deserves a trudge.

「同じ事を二度言うのは退去命令に値する。」

h. One dish should serve the turn. 「一皿で済ませておくべきである。」

次に、数詞の中で one と対比される頻度の高い two が用いられている (11) のような諺について考察したい。該当する10例のうちの7例では、(11a, b) のように worth によって主部と述部が対比されている。他の3例中2例では、対比は(11c, d)のように比較表現を用いてなされている。なお、この対比は one と two という数詞だけではなく、(11b, c)では bad と good という相反する形容詞によって、(11e, f)では heels-hands, shrew-sheep という頭韻によって強調されている。ちなみに、残る1例の(11g)では対比は数詞だけに依存している。

(11) a. One hour today is worth two tomorrow.

「今日の一時間は明日の2時間に値する。」

b. One suit of good apparel is worth two of bad.

「よい衣服の一揃いは悪い衣服の二揃いに値する。」

c. One bad general is better than two good ones.

「三流の将軍一人の方が一流の将軍二人よりよい。」

d. One foot is better than two crutches.

「二本の松葉杖よりも一本の足。」

e. One pair of heels is worth two pair of hands.

「一對の踵は二対の手に値する。」

f. One shrew is worth two sheep.

「がみがみ女房一人はおとなしい女房二人分の値打ちがある。」

g. One journey and two errands. 「一回の旅で二つの用件を片付ける。」

一方、one が3から100までの数詞と共に共起する18例の場合、worth または比較表現によって主部と述部が対比されているのは11例に過ぎない。この中には(12a)の as~as という等位形式が用いられているものと、than ではなく the worse によって比較を表す(12b)の1例も含まれる。その他の例では、(12c-g)のように主語と目的語の関係が表されていて、one と two の例には全く見られなかったものである。

(12) a. One reason is as good as fifty.

「理由は一つあれば五十あるのと同然である。」

- b. One year a nurse and seven years the worse.
「一年間乳母をすると七年間もっと悪い女になる。」
- c. One Englishman can beat three Frenchmen.
「一人の英人は三人の仏人を打ち負かすことができる。」
- d. One hour's cold will spoil seven year's warming.
「1時間の寒冷で7年間の暖房がフイになる。」
- e. One year's seeding makes seven year's weeding. 「一年雑草の種が地に落ちるのを許すと七年除草しなければならなくなる。」
- f. One fool makes a hundred. 「一人の馬鹿は百人の馬鹿を作る。」
- g. One pair of ears draws dry a hundred tongues.
「一人の耳は百人の舌をからからに干上がらせる。」

One~, two~, three~, ...のような列挙型の諺は(13)の2例のみである。いずれも生活や商売の知恵として言い伝えられてきたもので、数詞が4または5以下であるのは諺が長くなることに対する配慮に起因するのであろう。なお、(13b)は馬を買うときの注意を記したものである。

- (13) a. One egg is none, two somewhat, three enough, four be too much, five give a deadly blow. 「卵は一つでは食べたことにはならない。二つならまあまあ、三つなら十分、四つは食べすぎ、五つは命取り。」
- b. One white foot — buy him; two white feet — try him; three white feet — look well about him; four white feet — go without him. 「白い足が一本のは買え、二本のは試してみよ、三本のは前後左右をよく調べよ、四本のは買わずにおけ。」

1.3. One が数詞と対比されない型

One から hundred までの数詞が述部に用いられない諺は13例である。このうち最も多く用いられているのは all (5例)、次いで a/the whole (4例)、many (2例)、a basketful of と a score of (1例) という順である。この型の場合、worth または比較表現を用いて one と対比されるのは(14a, b)の2例と(14e, f)の2例のみであり、他の9例では(14c, d)のように影響関係が表されている。それゆえ、one と対比するには数詞が最も効果的であると考えられていることが分かる。

- (14) a. One good lordship is worth all his manners.
「領主の一善政は彼のすべての館に値する。」

- b. One acre of possession is worth a whole land of promise.
「1 エーカーの所有地は約束の土地全部に値する。」
- c. One drop of poison infects the whole tun of wine.
「一滴の毒液はぶどう酒の大樽全部を有毒にする。」
- d. One lie calls for many. 「一つの嘘は多くの嘘を必要とする。」
- e. One grain of sharp pepper is better than a basketful of gourds.
「ぴりっとする一粒の山椒は一籠のひょうたんにまさる。」
- f. One positive weighs more than a score of negatives.
「一つの肯定は二十の否定よりも重要である。」

1.4. 否定文となっている諺の中の one

非独立の one で始まる諺が否定文である場合は11例生じるが、数詞が one と対比されているのは(15a, b)の2例のみである。その他の例では、数量に関わる語としては(15c)の many が一例用いられているだけで、残りの8例では(15d, e)のように数量とは無関係の名詞(句)が目的語や補語となっている。ちなみに、(15c)の one は数詞ではなく、不定冠詞の a と交替可能な唯一の例である。この例を除くすべての例では、one は数として十分ではないことを表している。興味深いのは、頭韻が意図されていると思われる(15e)のような例が過半数の6回用いられていることである。もっとも、否定の諺に規則的なリズムは確認できない。

- (15) a. One ass cannot carry two proud men.
「ろば一頭には高慢な人間二人は乗れない。」
- b. One bush cannot harbour two robin redbreasts.
「一つの茂みは二羽のこまどりをかくまえない。」
- c. One butcher does not fear many sheep.
「屠殺業者は相手の羊がたくさんいても恐れない。」
- d. One fair day in winter makes not birds merry.
「冬一日だけ快晴でも、鳥どもは陽気にならない。」
- e. One swallow makes not summer.
「燕が一羽来たたとて夏にはならない。」

1.5. まとめ

非独立用法の one で始まる諺のほとんどの例において、one は「一つの、一人の」などの数詞として用いられている。この one と対比されるのは another と数詞であるが、この数詞には制約があり、one, two, three などの特定の数

詞以外は用いられない。一方、優勢な 'one-another' 型に対応する 'one-the other' 型は全く生じない。この理由は、another は先行する one の主要語の代名詞と照応しうるのに対して、「その他の、後者の」を意味する the other はあらかじめ母集団が明示されていなければならない、one で始まる諺では、長さに対する配慮などにより、この母集団を提示できないからであると思われる。諺の多くは一般に古くから人々に親しまれてきたが、リズムや頭韻という形式面での工夫は積極的になされているとは言いがたい。

II. 独立用法の one で始まる諺とその用法

諺の冒頭に用いられた独立用法の one は所有形の one's (3 例) を含め、52 例が分析対象となる。非独立用法の one のほとんどは限定用法の数詞であったが、これとは対照的に、独立用法の one は大半が「人」を表す名詞または代名詞として用いられている。独立用法の one を冒頭に用いた諺は16世紀中頃から17世紀中頃に集中しているが、これも Tilley の収集した諺に依拠しているからであろう。15世紀以前のものはわずかに1例、20世紀では皆無であるが、全体として見た場合には、非独立用法の one で始まる諺の場合とかなりよく似た分布を示す。一方、ギリシア語やラテン語の翻訳による諺は16世紀の4例と17世紀の初頭の2例のみで、以後は全く用いられていない。フランス語の諺を翻訳したものは18世紀と19世紀のそれぞれ1例のみである。

2.1. (代)名詞用法の one で始まる諺とその用法

本稿で分析対象とした one は諺の冒頭に位置するものに限られていることから、独立用法の one は単独で主語として用いられる可能性が高くなることが予想される。事実、49例の大半は(16a)のように単独で主語となっていて、主語とはならない例は(16b)の代名詞用法の one と(16c)の数詞の2例のみである。残る1例の(16e)の one は代名詞であるが、この諺は文を形成していない。

(16) a. One may as well be hanged for a sheep as a lamb.

「親羊を盗んで死刑になるのは子羊を盗んで死刑になるのと同じに結構なことだ。」

b. One of these days is none of these days.

「『近日』は『おととい』の謂。」

c. One and none is all one. 「一と零とは全く同じである。」

d. One, but (that one is) a lion.

「たったの一頭、しかし（その一頭は）ライオンである。」

e. One of the court but none of the counsel.

「廷臣の一人だが顧問ではない。」

次に、one の大半は(17a)のように「人」を表す。One が「人」以外の意味を表す場合は少なく、(17b)のような数字の「一」が3例、(17c)のような「一つ(一人、一頭、一羽を含む)」が5例である。

(17) a. One hath more ado to preserve than to get.

「獲得するよりも保持するために、人は大骨折する。」

b. One, two, three, four are just half a score.

「1, 2, 3, 4は20のちょうど半分である。」

c. One for the mouse, one for the crow, one to rot, and one to grow.

「一つは鼠の分、一つは鳥の分、一つは腐る分で後の一つが生える分。」

One が「人」を表す場合、この人が「ある人、一人の人」を意味するのは 'one-another' 型を形成する例に限られる。ただし、非独立用法の one の場合とは異なり、該当する例は(18)の3例に留まる。なお、これらの例において、one と対比する another は二番目の節の主語となっている。

(18) a. One beats the bush and another catches the bird.

「甲が茂みを打ちあさり、乙が鳥を捕まえる。」

b. One does the scathe and another has the scorn.

「甲が悪事を働き乙がさげすまれる。」

c. One sows, another reaps. 「甲が種を蒔き乙が収穫する。」

One が「人一般」を表し、諺の主語となる場合、この one は意味上 a man と同義であるが、両者の交替形が知られているのは(19)の4例のみである。なお、one が a man と交替する理由の一つとして、頭韻の可能性が考えられる。たとえば、(19b, c, d)のような例では one が man と交替すると man と may が頭韻するようになる。しかし、助動詞 may は本来弱強勢であることから、仮に may を韻律上の強音部に昇格させると man と強勢衝突(stress crash)を起すことから、今度は man の強勢を韻律上の弱音部に降格させねばならなくなる。弱音部の頭子音が頭韻に関与するのは一般にありえないことから、(19)の例において、one は頭韻のために man と交替しているとはいえない。

(19) a. One/A man cannot drink and whistle at once.

「同時に飲んだり口笛を吹いたりはできない。」

- b. One/A man may as soon break his neck as his fast there. 「人はあの家では食事にありつくよりも首の骨を折るほうが容易である。」
- c. One/A man may more easily fall than rise.
「立ち上がるよりも倒れる方が容易である。」
- d. One/A man may see day at a little hole.
「人は小さな穴からでも昼の光を見ることができる。」

主語の one が you と対比させられている (20a, b) の 2 例では, one は意味上 we または I と交替が可能である。ただし, これらの one/we/I で言い換えると, 諺は一般の文と変らなくなる。交替形が避けられているのはこのような理由に基づくものと思われる。

- (20) a. One knows not where to have you.
「われわれはどこで君を捕まえたらよいか分からない。」
- b. One may know your meaning by your gaping.
「君が口を開けば君の言いたいことは相手に分かる。」

主語の one を代名詞で受ける場合, (21a, b) のような one (または one's) か, (21c, d) のような he (または his) のいずれかであるが, いずれの場合も 6 例ずつ生じていて, 選択の基準は明確ではない。なお, 類似の交替例は 3.7. の man にも生じる。

- (21) a. One can go a long way after one is weary.
「人は疲れてから, さらに長距離を歩くことができる。」
- b. One has always strength enough to bear the misfortune of one's friends. 「人は常に友人の不幸に耐えるに十分な力を持っている。」
- c. One is not bound to see more than he can.
「人には見る能力以上のものを見る義務はない。」
- d. One may know by his nose what pottage he loves.
「鼻を見ればその人がどんなスープが好きなのかが分かる。」

2. 2. 限定用法の one で始まる諺とその用法

独立用法の one の限定的形式である one's は (22) の 3 例に用いられている。例が少数であることから一般化はできないが, このうちの 2 例 (= 22a, c) では one's は his ではなく, one's で受けられていて, one の場合と同じ特徴を示す。一方, (22c) では fouls と fingers は頭韻が意図されている可能性がある。

- (22) a. One's heart is in/goes into/sinks into one's boots.
「心臓が靴の中にある。→落胆する, などの意。」

- b. One's own fire/hearth is pleasant.
「自分の家の（いろりの）火は楽しい。」
- c. One's own work fouls not one's fingers.
「自分自身の仕事では指は汚れない。」

まとめ

独立用法の one と非独立用法の one で始まる諺はいずれも大半が16世紀中頃から17世紀中頃に作られたものである点は共通しているが、前者が後者と大きく異なる点が二つある。すなわち、前者では、one の大半が数詞ではなく「人」を表す名詞または代名詞として用いられていること、および、another と対比される例と数詞として用いられる例がごく少数であることである。なお、前者の one は a man と交替可能な場合があり、また、この one は he で受ける場合と one で受ける場合に分かれる。いずれの根拠も明確ではない。

Ⅲ. Man で始まる諺とその用法

前節で確認したとおり、独立用法の one で始まる諺のうち、4例の one は a man と交替が可能であった。それならば、a man で始まる諺の a man は one と交替しうるのであるのか。A man のみならず、men や man で始まる諺の場合ではどうなるのか、a man's, men's, man's という非独立用法の形式も用いられているのか、そのような例には制約が課されているのか、などの疑問が出てくる。したがって、以下の節ではこれらの疑問点について考察したい。ちなみに、これらの形式を頻度数の順に列挙すると、a man (82例)、men (24例)、man (11例)、the man (2例)、the men (1例)となる。ちなみに、a man で始まる諺は one の場合と同様、大半が16世紀中頃から17世紀中頃に由来し、中でも17世紀初頭の例は全体の3分の1強の31例に達する。外国語起源の諺は比較的少なく、ラテン語は7例、フランス語は1例のみである。

3.1. A man で始まる諺とその用法

A man で始まる諺には興味深い特徴がいくつか認められる。第一に、a man はたいていの場合(=82例中78例)、「人」を表し、he/his/him という人称代名詞と照応していても、a man は(23a, b, c)のように「男」を意味することはない。ちなみに、a man が「男」を表すのは、woman または wife と対比される(23d, e)を含む4例に限られる。

- (23) a. A man can do no more than he can.

「人は能力以上のことはできない。」

- b. A man far from his good is nigh his harm.

「福利から遠い者は災害に近い。」

- c. A man may soon see what is in him.

「人はじきに自分の資質（能力）を知るであろう。」

- d. A man is as old as he feels, and a woman as old as she looks.

「男の年は気持通り，女の年は顔つき通り。」

- e. A man may woo where he will, but wed where his wife is.

「男は好きな場所で求婚できるが結婚の場所は妻のいる所でなければならぬ。」

次に，a man が one と交替するのは(24a, b)の2例にすぎず，むしろ，men と交替する(24c, d)のような場合(4例)の方が多い。さらに，(24e, f, g, h)の I, every man, you, they (we)のように，他の代名詞や名詞句と交替することもある。

- (24) a. A man/One cannot be in two places at once.

「人は同時に二箇所にはいられない。」

- b. A man/One may come soon enough to an ill bargain.

「人は高い買い物をしがちである。」

- c. A man is known by the company he keeps./Men are known by the company they keep. 「人は交わる友達によって知られる。」

- d. A man may bear until his back break./Men may bear till their backs break. 「人は背中が折れるまで我慢することがある。」

- e. A man/I cannot spin and reel at the same time.

「人は同時に紡いだり巻き取ったりすることはできない。」

- f. A man/Every man is a man. 「人間は人間である。」

- g. A man/You may lead a horse to (the) water but (he) cannot make him drink (unless he will). 「人は馬を水際へ連れて行くことはできるが馬にその気がなければ水を飲ませることはできない。」

- h. A man/They/We need not look in your mouth to know how old you are. 「人は君が何歳かを知るために君の口を覗き込む必要はない。」

三番目に，a man で始まる諺は，独立用法の one で始まる諺と同様に，人の行為や状態を表す例が大半を占め，対比や譬えを表す(25c, d)のような例は少ない。この点において，非独立用法の one で始まる諺とはかなり異なる。

- (25) a. A man may buy gold too dear.
 「人は高すぎる値で金を買うことがある。」
- b. A man assaulted/surprised is half taken.
 「不意打ちされた者は半ば捕らえられたのに等しい。」
- c. A man alone is either a saint or a devil.
 「独りでいる人は聖人か悪魔である。」
- d. A man of straw is worth a woman of gold.
 「わらの男でも金の女の値打ちがある。」

3.2. A man's で始まる諺とその用法

A man の限定用法である a man's は12回生じる。この形式は(26a)では例外的に an Englishman's と交替するが、one's と交替する例は全くない。なお、a man's の a man は(26b, c)のように常に he/his/him と照応する。

- (26) a. A man's/An Englishman's house is his castle. 「人の家は城である。」
- b. A man's country is where he does well.
 「人が無事幸せに暮らせる所がその人の祖国である。」
- c. A man's discontent is his worst evil. 「不満は最大の災害である。」

3.3. The man で始まる諺とその用法

Man が不定冠詞ではなく定冠詞を伴う the man は2例にすぎない。このうち、(27a)の the man は a man と交替しているが、a man で始まる諺の中で a man が the man と交替する例は全くないことから、the man~の方が標準的であると考えられる。一方、(27b)の諺には、下線部の3箇所において異なる異形(The holy man of God will be better with his bows and arrows about him.)が知られているが、「聖者、聖職者」は一般に a man of God であることから、この例は a man of God~と交替が可能であろう。

- (27) a. The/A man has no more goods than he gets good of.
 「人の持つ財産の額とはその人が利用できる財産の額である。」
- b. The man of God is better for having his bows and arrows about him. 「聖職者も弓矢を携えていればいっそうよろしい。」

3.4. Men で始まる諺とその用法

Men で始まる諺では、men は一般に(28a)のように「人間、人(一般)」を表すが、(28b, c)のように women と対比される場合に限り、「男または夫」を表す。(28d)の場合、men は women と交替可能であるが、women とは対比されていないので、「男または夫」ではなく「人間、人(一般)」であろう。い

ずれにせよ, men は(28d, e, f, g)のように常に they/their/them と照応し, men で受けることはない。この点において一部の one や後述の man とは異なる。一方, men は(28e, f)では every man や every one と交替しているが, これらも one や a man には認められなかった特徴である。ちなみに, men は(28g)のように we や a man とも交替しうる。

(28) a. Men are best loved furthest off.

「人は一番遠く離れているとき一番愛される。」

b. Men get wealth and women keep it.

「夫は富を手に入れ妻はそれを蓄える。」

c. Men make houses, women make homes.

「夫は家を作り妻は家庭を作る。」

d. Men/Women may blush to hear what they were not ashamed to act. 「人は自分では臆面もなくやらかすくせに他人がしたと聞くと赤面する。」

e. Men are blind in their own cause./Every man is blind in his own cause. 「人は自分自身の(利益)のためには盲目になる。」

f. Men know where they were born, (but) not where they shall die./Every one knows where he is, but not where he shall die.

「人は生まれた場所は知っているが死ぬ場所は知らない。」

g. Men/We must do as they/we may, not as they/we would./A man must do as he can, when he cannot as he would. 「人は能力に従って事をなすべきで欲望に従ってしてはならない。」

3.5. The men で始まる諺とその用法

諺の冒頭の men が定冠詞を伴う例は(29)のみである。この場合, men は le-man や lier-by と対比されていることから, 「男」を表し, Tividale という固有名詞に限定されることから定冠詞を伴うものと思われる。

(29) The men of Tividale have likers, lemans, and lier-bys.

「ティヴィディルの男たちには好いてくれる女と情婦と妾とがある。」

3.6. Men's で始まる諺とその用法

Men の限定形式である men's は(30)の1例のみであり, 代名詞の they が men と照応している。

(30) a. Men's years and their faults are always more than they are willing to own. 「人の年齢と欠点は必ず本人が認めることを肯んじ

る数よりも多い。」

3.7. Man で始まる諺とその用法

Man で始まる11例の諺は興味深い特徴を示す。すなわち、第一に、大半の9例において、man は(31a, b)のように「人間」を表し、対比されるのは God または a god のみである。第二に、主語の man と照応して he で受けるのは(31a)のみであり、他はすべて(31b, c, d, e)のように、man または the man であり、この点において a man や men と大きく異なる。第三に、man は one や a man とは異なり、(31f, g)のように「男」を表すことができる。ただし、この場合、woman と共起することが前提であると思われる。第四に、man で始まる諺は半数以上の6例(=31b, d, e, f など)がギリシア語またはラテン語に由来し、外来語起源の諺が全体として少数であることを考えると、この高い比率は際立っている。

(31) a. Man does what he can and God what he will.

「人間は自分に可能なことをする、神は欲することを。」

b. Man is a god to man. 「人間は人間にとって神である。」

c. Man honours the place, not the place the man. 「人間が地位の名誉を高めはするが地位が人間の名誉を高めはしない。」

d. Man is a wolf to man. 「人間は人間にとって狼である。」

e. Man is either a god or a wolf to man.

「人間は人間にとって神かまたは狼である。」

f. Man is the head, but woman turns it.

「男は頭であるが女はその向きを変える。」

g. Man, woman, and devil, are the three degrees of comparison.

「男、女、悪魔は比較の三級である。」

3.8. Man's で始まる諺とその用法

Man の限定用法形の man's は(32)の1例のみであるが、「神」と対比されていることから、man は「男」ではなく「人間」を表すことが分かる。これは3.7.の man の場合と同様である。

(32) Man's extremity is God's opportunity. 「人間の窮境は神の機会である。」

3.9. まとめ

A man と men は「人」を表す点において基本的に異なることはないが、後者は one と交替しない点において前者とは異なる。一方、man は woman と対比されない限り「人間」を表し、「神」と対比されるものとして捉えられて

いる。

IV. 全体のまとめ

諺の冒頭に位置する *one* は用法によって意味が全く異なり、非独立の限定用法では数詞の「1」が基本であるが、独立用法では一般に「人」を表す。独立用法の *one* は *a man* と交替する例がいくつかある。*Man* で始まる諺の場合、不定冠詞 *a* を伴う例が最も多く、*a woman* と対比されない限り、「男」を意味することはない。定冠詞 *the* を伴う *man* と *men* は合計3例にすぎず、一般化は不可能である。一方、冠詞を伴わない *man* と *men* の場合、*woman* や *wife* などの「女」を表す語と対比されない限り、「男」は表さない。*Men* は一般に「人」であるが、*man* は「神」と対比される「人間」が基本にある。*One* や *man* に限らず、16世紀と17世紀に成立した諺が圧倒的に多い背景には、Tilley の貢献がある。いずれの諺においても、韻律上の特徴は顕著とは言えない。

参考文献

- Evans, Ivor H. (1977) *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, Cassell, London.
 大塚高信, 高瀬省三(1976) 英語諺辞典, 三省堂, 東京。
 Pearsall, Judy (1998) *The New Oxford Dictionary of English*, Clarendon Press, Oxford.
 Rissanen, Matti (1967) "The Uses of *One* in Old and Early Middle English", *Mémoires de la Société Néophilologique de Helsinki*, Vol. XXXI Société Néophilologique, Helsinki.
 Speake, Jenifer (1982) *The Oxford Dictionary of Proverbs*, Oxford University Press, Oxford.
 Tilley, Morris (1950) *Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, AMS Press, New York.
 Wehmeier, Sally (2005) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, Oxford University Press, Oxford.
 Wilson, F. P.(1970) *The Oxford Dictionary of English Proverbs*, Oxford University Press, Oxford.

「本稿は平成18年度科学研究費補助金（基盤研究(C))「英語の不定代名詞の通時的研究」(研究代表者：藤原保明, 課題番号：17526317) の交付を受けて行われた研究成果の一部である。」